壁の向こうのダントン

清流劇場2019年3月公演

出演／
西田政彦 遊気舎 Nishida Masahiko
上田泰三 MousePiece-ree Ueda Taizo
高口真吾 Takaguchi Shingo
泉希衣子 Izumi Keiko
倉増哲州 南森町グラスホッパーズ Kuramasu Tessyuu
杉江美生 Sugie Mio
田村K・1 Tamura K-1
永津真奈 Aripe Nagatsu Mana
松本祐子 Matsumoto Yuko
大森千裕 Ohmori Chihiro
山田一幸 栄亜 shu-A Yamada Kazuyuki
上海太郎 上海太郎カンパニー Shanghai Taro

ボクらはみんな操り人形さ、
見知らぬ強い力で操られているんだ。

原作／ゲオルク・ビューヒナー
作・演出／田中孝弥
ドラマトゥルク／柏木貴久子
原作翻訳／岩淵達治・山下純照

音楽・演奏／仙波宏文
特別協力／森和雄

SEIRYU THEATER 2019
Dantons Tod

Urtext : Georg Büchner
Text & Regie : Tanaka Atsuya
Dramaturgie : Kashiwagi Kikuko
Übersetzung (Urtext) : Iwabuchi Tatsuji, Yamashita Yoshiteru

Komposition & Klavier : Semba Hirofumi
Sonderrolle : Mori Kazuo

SEIRYU THEATER 清流劇場

ご挨拶

清流劇場 代表　田中孝弥

ビューヒナー作品に取り組むのは、約六年ぶりになります。前作は『WOYZECK version FUKUSHIMA』という作品でした。原作は『ヴォイツェック』。貧困にあえぐ下級軍人（主人公）と、福島第一原発の過酷な環境下で働く廃炉作業員とを重ね合わせた翻案作品でした。

今回も原作『ダントンの死』に新たなモチーフ「壁」を加えた翻案作品として上演致します。この「壁」については、あらすじでも触れていますので、そちらもお読みいただければと思います。

さて、この『ダントンの死』。作品を読み進めていくうちに気付いたのは、シラーの『メアリー・ステュアート』（清流劇場二〇一七年一〇月上演）との類似性でした。ビューヒナーはゲーテ作品が好きで、シラー作品はあまり好まなかったと聞きます。しかし、よく似ているのです。

『ダントンの死』に於けるフランス革命の立役者二人、ロベスピエールとダントンの対決場面などは、シラー作品に於けるエリザベス（イングランド女王）とメアリー（スコットランド女王）のそれと重なる、非常に緊張感のある場面です。頭でっかちな政治理論・思想の対立の先に見える、剥き出しの人間像。そこが大変魅力的なのです。ロベスピエールとダントンは同根とも言えるほど、本質的な部分が似ているにも関わらず、人との出会いや、運のようなものに左右され、生きていく上での優先順位（価値観）に違いが現れたり、嫉妬深くなってみたり、豪放磊落な性格を帯びてみたりするのです。人間の持つ悲しさや魅力、面白さや深みがそこに見えます。

登場人物の度量の狭さや臆病さを見る度に、ボクは自分のことを言い当てられているように感じ、こそばゆくなってしまうのですが、やはり、優れた作品というのは、こういう人間のもつ普遍的な面をきちんと描けているものを指すのだなあと改めて感じます。

先程新たなモチーフに「壁」を加えたと申しました。今年二〇一九年はドイツ・ベルリンの壁崩壊から三〇年になります。原作『ダントンの死』は東西ドイツ時代も勿論、それぞれの国で上演されてきました。ビューヒナー文学の研究書『理念と肉体のはざまで』（谷口廣治著）によると、冷戦時代のこの作品の上演は西と東でどうやら、大きく演出（解釈）が異なったようです。勿論色んな演出があったでしょうが、分かりやすい例を一つ挙げてみます。

西ドイツでは、ダントンを白、ロベスピエールを黒と描き分け、自由主義の象徴としてダントンを、社会主義の象徴としてロベスピエールを捉える。ダントンを愛すべき民衆的英雄として描き、そのダントンを処刑するロベスピエールを冷たく薄情な人物として描く。

一方、東ドイツでは、退廃的享楽主義的人物としてダントンを、道徳的で理想を追求する人物としてロベスピエールを捉え、ダントンの粛清はやむを得ないこととして描く。（ロベスピエールの独白を一部削除し、ダントン粛清に踏み切る動機に私怨が含まれないように編集を加えている）

これらのどちらが優れていたかという判断はするべきではないでしょう。視線を壁崩壊から三〇年経った現在に移してみます。壁が崩壊し、人類はどれほど前進したのでしょうか。その後もイスラエルでは分離壁が建設され、アメリカでも今まさに新たな壁がメキシコとの国境に建設されつつあります。壁はなくなっても、また作られています。今年は多くの血が流れたフランス革命から二三〇年目でもあります。ボクたちの暮らす社会に皆が満足できる日が訪れることはないのかもしれません。しかし、絶望だけを抱えて生きていくのは、あまりにも人生が辛すぎます。小さな希望や自分への期待を胸に、少しでも進歩したいと努力を続けられる生き方をしたい。そうボクは思っています。

本日はご来場ありがとうございます。ごゆっくりお楽しみ下さい。

『壁の向こうのダントン』作品解題

柏木貴久子　清流劇場ドラマトゥルク・関西大学教授

フランス人は、今なお、市民革命を成し遂げた国の民としての誇りを持っていると言われる。フランス革命は、封建制を打破し、新時代を導いた偉業として意識され、革命時のスローガンである「自由・平等・博愛」は、フランス共和国の標語として学校、公共施設、教会の入口に刻まれている。人は日々、この標語を見ながら生活しているというわけだ。

革命によって崩壊した絶対王政は、このフランスの地で栄華を誇った。「太陽王」と呼ばれたルイ十四世の治世下、最盛期を迎えたフランス宮廷は、ヨーロッパ貴族の憧れの的だったのだ。しかし財政状況は徐々に悪化、特権階級への課税が提案されるに至る。背景となったのは理性への信頼と希望に基づく啓蒙思想であった。ルソーが重視する国民主権、モンテスキューが提唱する三権分立による権力の分配は革命への道を開いた。貴族の一部でもこの思想は支持され、三つの身分（聖職者、貴族、平民）による三部会が開かれる。一七八九年、ルイ十六世はついに国民議会を承認し、憲法制定の作業が始まる。実はこれがまず革命的な出来事だったのだ。しかし権利の平等、封建制の撤廃、教会財産の国有化を盛り込んだ議会案を国王が拒否すると、治安は一気に悪化、民衆はバスティーユ監獄襲撃に向かう。これが革命への市民の参加、すなわち革命の始まりであった。

速やかな改革が求められるものの、多様な市民層の中で派閥は分裂、政治は混沌とした。ヨーロッパ宮廷社会が新しいフランスに敵対するなか、ナショナリズムの高まりと共に、民衆の革命は新たな局面に入る。一七九二年、人々を鼓舞し、王政停止の立役者となったダントンは司法大臣となる。反革命分子が殺害された「九月虐殺」の後、国民公会が開かれ、フランスは共和国となる。革命は過激化する。ルイ十六世の処刑で始まった一七九三年、革命政府は急進化、対仏同盟が引き起こす食糧難に苦しむ新生フランスで、パリは恐怖政治の舞台となってゆく。革命は止まらない。秋には王妃マリー・アントワネットも断頭台に消えた。一七九四年、ロベスピエールとその一派は、革命を停滞させると思われる派閥を粛清するに至る。革命は、制御ができなくなった車輪のように、いよいよ速度を上げて回転する・・・

・・・ここで本作品『壁の向こうのダントン』が幕を開ける。中心をなすのはダントンとロベスピエールという二人の指導的人物。革命への志を共有していたものの、革命の暴走に不信感を募らせる穏健派のダントンと潔癖主義的急進派のロベスピエールは次第に対立を深める。そして、生活の楽しみを重要視するダントンと禁欲主義的なロベスピエールは、一人の女性をめぐって対峙する。彼女の名はマリオン、聖母マリアのフランス風愛称である。羨望を集めながら誰のものにもならない「自由の女神」は、自由という公的権利への要求を象徴しながら、生きることへの個の欲求を問いかける存在でもある。

革命は元来、社会的存在としての個々の権利をマジョリティーとしての集団で訴え、体制を覆そうとするものだ。すなわち「俺たちが民衆だ」と―。革命のエネルギーを集約するかのようなこの言葉は、ゲオルク・ビューヒナーの原作『ダントンの死』においても、本作品においても鍵となっている。そして、フランス革命から二百年を経た一九八九年、東ドイツ崩壊を促すスローガンにもなった。「俺たちが民衆だ Wir sind das Volk」は「俺たちは一つの民衆だ Wir sind ein Volk」という主張と溶け合い、東西ドイツを隔てるベルリンの壁は壊された。

東西ドイツ統一、冷戦の終結という二〇世紀の革命的出来事から時を経た二〇一九年。グローバル資本主義が臨界点に達したかに見える今日、私たちの前には新たな壁が立ちはだかる。

019

nsTod

Schauspieler :

Nishida Masahiko (Yukisya)

Ueda Taizo (MousePiece-ree)

Takaguchi Shingo

Izumi Keiko

Kuramasu Tessyuu (Minamimorimachi Grasshoppers)

Sugie Mio

Tamura K-1

Nagatsu Mana (Aripe)

Matsumoto Yuko

Ohmori Chihiro

Yamada Kazuyuki (Shua)

Shanghai Taro (Shanghai Taro Company)

Komposition & Klavier : Semba Hirofumi

Sonderrolle : Mori Kazuo

一体何のために、戦い合わなきゃならないんだ。ボクら人間は

SEIRYU THEATER 2

Danton

Urtext : Georg Büchner
Text & Regie : Tanaka Atsuya
Dramaturgie : Kashiwagi Kikuko
Übersetzung (Urtext) : Iwabuchi Tatsuji
Yamashita Yoshiteru

俺たちが民衆だ。

キャスティング

国民公会の代議員

ダントン派。寛容派。恐怖政治の廃止や、反革命容疑で追放された議員の復職を求める。

幼友達

ジョルジュ・ダントン
田村K-1

カミーユ・デムーラン
西田政彦
（文筆家）

ピエール・フィリポー
上田泰三

立

相互に好意

夫婦

三人を
逮捕・監視

マリオン
永津真奈
（自由を求める女性）

リュシール
杉江美生

警官・看守
森和雄

ポール
上田泰三

ジャック
倉増哲州

マルク
森和雄

アメリ
杉江美生

ミシェル
泉希衣子

マノン
大森千裕

壁崩壊後に金持ちになった

資本家
泉希衣子

夫婦

資本家
上田泰三

貴族
倉増哲州

Erzählung von „Dantons Tod"

『壁の向こうのダントン』あらすじ

2019年は、ベルリンの壁が崩壊して30年目に当たります。そこで、今回は『ダントンの死』を原作に、《壁》を題材とした翻案作品を上演します。

舞台は18世紀末のパリ。フランス革命が起こり、ルイ16世とマリー・アントワネットが処刑され、共和政へと社会が移行していく頃の物語。

貧困にあえぐ民衆たちが広場に集まっています。近くには壁があり、その向こう側では、王侯貴族が贅沢三昧に暮らしているからです。民衆たちの怒りは沸点に達します。彼らは壁を壊し、王侯貴族を引きずり出し、ギロチンにかけていきます。

しばらく後、王侯貴族に代わって、台頭してきたのは資本家たちでした。壁が崩れた後も、暮らしは上向かず、 民衆たちは次第に暴徒化していきます。ついには、牢獄にいる反革命派の政治犯が反撃してくるというデマが流れ、民衆たちは「やられる前にやってしまえ!」と、牢獄を襲撃、虐殺事件を起こしてしまいます。

この事件を機に、「人の死はもうたくさんだ。革命は終わり、共和国を始めなければならない。寛容を旨とするのだ」と唱えるダントンと、「革命は道半ばであり、恐怖政治と道徳による統治が必要である」と主張するロベスピエールの政治的対立が激しくなっていきます。

フランス革命期の社会を描いた原作に、《目の前にそびえる壁》や《目に見えない心の壁》、《壁崩壊の先に夢見ていた社会》などを重ね合わせます。そのことにより、「自由」や「生きる権利」を求め続けてきた人類の歩みと、現代社会の抱える問題を見つめ、より良い未来について考えてみたいと思います。

（作品中の引用文献：『ダントン』ロマン・ロラン／作　波多野茂弥／翻訳）

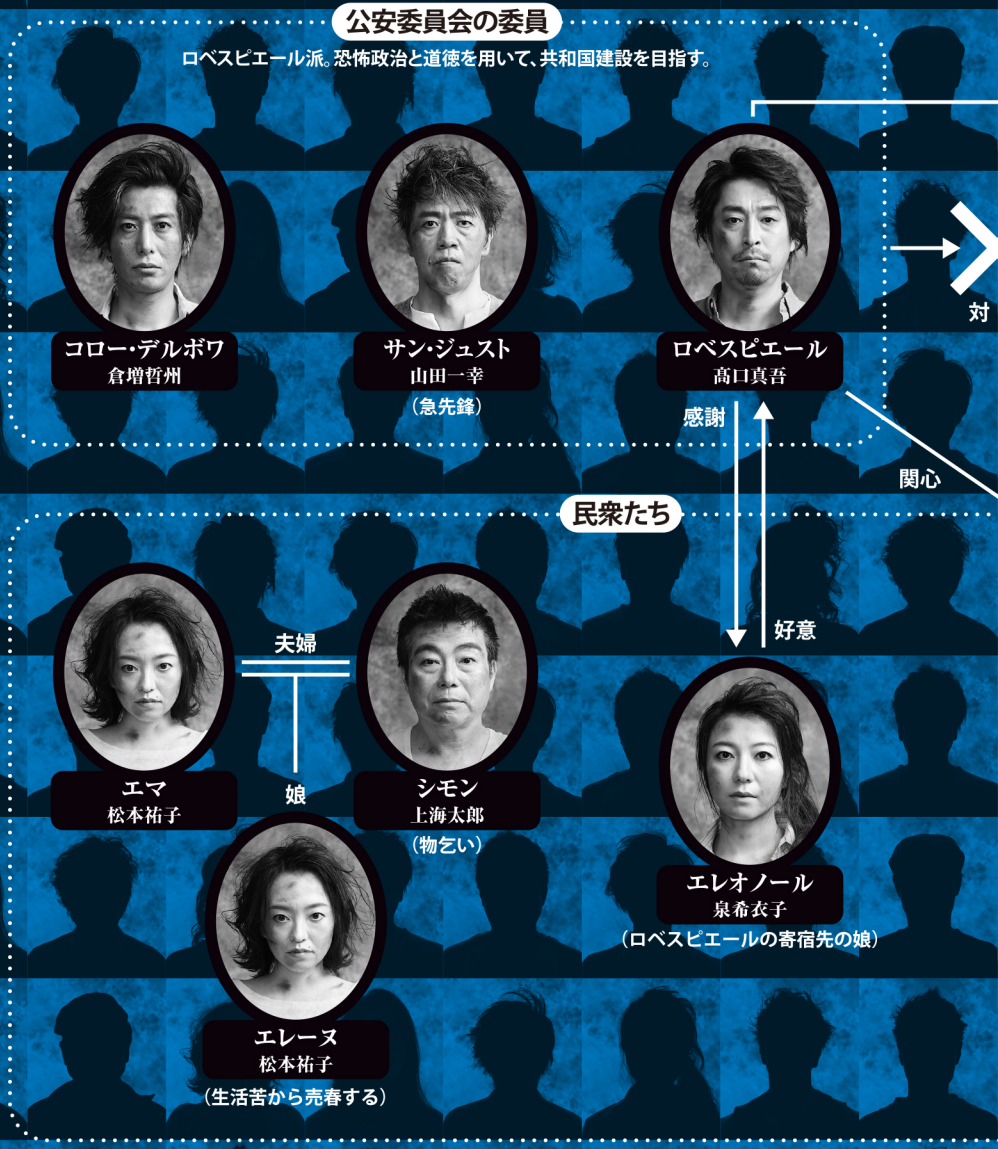
作家紹介（原作）

Karl Georg Büchner PROFIL

カール・ゲオルク・ビューヒナー
（1813年～1837年）
ドイツの劇作家・自然科学者・革命家。

ヘッセン大公領の首都ダルムシュタット近郊の小さな村ゴッデラウに医師の息子として生まれる。フランス領ストラスブール大学医学部に留学し、前年に起こったフランス7月革命（1830年）の余波に触れ、革命思想を吸収する。
2年の留学を終え、帰国。ギーセン大学で医学の勉強を続ける一方、反体制運動に参加。「あばら家に自由を、宮殿に闘いを！」と、大公を批判する『ヘッセン急使』を発表したことで、両親のいるダルムシュタット、さらにストラスブールに居を移す。逮捕を免れた後、チューリヒ大学で学業を再開、博士論文『バーベル鯉の神経系統について』で博士号を取得。論文が評価され、大学講師の職を得るものの、チフスに罹患し23歳4ヶ月の若さで客死した。
20世紀になって再発見された作品群はその後のドイツ文学界・演劇界に多大な影響を与え続けている。彼の名を冠したビューヒナー賞はドイツで最も権威のある文学賞である。
主な文学作品に『レンツ』（小説）・『レオンスとレーナ』（喜劇）・『ヴォイツェク』（未完戯曲）がある。

人物相関図・



1774→1799 フランス革命の時代

1774年	5月10日	ルイ16世が国王に即位。
1789年	7月14日	バスチーユ要塞（監獄）が陥落。→ フランス革命の本格的な幕開け
	8月26日	『人権宣言』が採択される。
1791年頃		現在のフランスの標語「自由・平等・友愛」が唱え始められる。
1792年	8月10日	パリの民衆と義勇兵が王宮を襲撃。→ 王政が倒れる
	9月 2日	反革命派狩り（民衆による牢獄襲撃）が起きる。→ 九月虐殺事件（～6日）
	9月21日	立法議会に代わって、国民公会が発足。→ 共和政の樹立
	12月 2日	ロベスピエールが「生存権の優位」を提唱。
1793年	1月21日	ルイ16世が処刑される。（マリー・アントワネットの処刑は10月16日）
	6月 2日	ジロンド派主要議員が国会から追放される。→ ジャコバン革命政府の時代へ
1794年	2月15日	フランスの三色旗（トリコロール）が国旗に制定される。
	4月 5日	内部分裂により、ダントン派が処刑される。→恐怖政治が深刻な事態になっていく
	7月27日	クーデターにより、ロベスピエール派失脚。翌日処刑。→ 革命路線が右寄りに転換
1795年	10月27日	国民公会が解散し、総裁政府が発足。
1799年	11月 9日	ナポレオンが政権掌握。（～10日）→ フランス革命の終わり

壁の向こうのダントン
Dantons Tod

2019年 3月 6日(水)19:00・7日(木)19:00・8日(金)19:00・9日(土)15:00・10日(日)15:00
(9日終演後アフタートーク開催)

会場／一心寺シアター倶楽
大阪市天王寺区逢阪 2-6-13 B1F tel：06-6774-4002 http://isshinji.net/kura/index.html

舞台監督／K-Fluss 舞台美術／内山勉 舞台美術アシスタント／新井真紀
照明／岩村原太 照明アシスタント／塩見結莉耶 照明オペ／木内ひとみ 音響／廣瀬義昭(㈲ティーアンドクルー)
衣装／田中秀彦(iroNic ediHt DESIGN ORCHESTRA) 小道具／濱口美也子
ヘアメイク／歯朶原論子(High Shock) ヘアメイクアシスタント／大谷仁衣菜 下山葵 振付／東出ますよ
写真／古都栄二(㈲テス・大阪) ビデオ／㈱WAVIC web・制作協力／飯村登史佳 宣伝美術／黒田武志(sandscape)
演出助手／大野亜希

協力／
㈲ウォーターマインド イズム ㈱MC企画 ㈱舞夢プロ パンタンデザイン研究所大阪校
丹下和彦 堀内立誉 雨宿いろの 石垣佐登子 峯素子 加藤沙知 佐々木治己 川口典成
嶋田邦雄 山下智子 森岡慶介 居原田晃司 Michael Wetzel

提携:一心寺シアター倶楽 制作／永朋 企画／清流劇場

アフタートーク出演者／
パネラー：田中孝弥(清流劇場代表) 柏木貴久子(清流劇場ドラマトゥルク・関西大学教授)
インタビュアー：九鬼葉子(演劇評論家・大阪芸術大学短期大学部教授)

芸術文化振興基金助成事業 大阪市助成公演

https://seiryu-theater.jp
お問い合わせ：清流劇場 e-mail：info@seiryu-theater.jp

清流劇場ウェブサイトでは、過去の作品のダイジェスト映像や舞台写真を公開しております。是非、ご覧下さい。

メンバー募集 ● 清流劇場の活動に興味のある方、俳優・スタッフに興味のある方は、劇団までご連絡下さい。